

# あるむぜお46

府中市郷土の森だより

al museo NO. 46

1998年12月20日



## 園内歳時記

文学の世界から広がった「**雑木林**」という表現。いつ頃から使われ始めたのかは定かではありませんが、マツ・スギなどの有用樹に比べて、たいした役にも立たぬ雑な木の一群を指したものでしょうか。

国木田独歩の「武蔵野」における雑木林……独歩は「落葉林」という表現を用いています。雑木林は元来自然林ではなく、歴史的・人為的に、まさに作られた人口林のひとつです。クヌギ・コナラ・クリなどを中心とした落葉広葉樹で構成されており、これらは自然林を伐採したり、火入れをしたりと、人の手が加わった後、二次的に発生した林なのです。薪や炭、または堆肥に利用する落葉などが確保できる農用林として、長い間農業に

は必要不可欠なものだったわけです。

雑木林は生活に密着した林……逆に人の影響を一番に受けやすい林とも言えます。近代化に伴う都市開発は、ここ十数年で本格的に雑木林を破壊し始めています。かつて文学の世界で紹介されてきた雑木林が醸し出す、心のふるさと、生活の詩といった情景が失われつつあるのです。

園内もすっかり冬の装いで、雑木林の下に積もる山ほどの落葉が足元に心地よい感触を与えてくれます。弱々しい日差しこぼれる木立を歩いていると、不思議に心が浄化されていくような清々しさを覚えます。同時にこんな思いがよぎります。長い間続いた自然との交流を断ち切ることは人間にとって大きな損失になるのではないかと……と。

# ‘98ワイルドライフ写真大賞展

—BBCワイルドライフ誌+英国自然史博物館による—

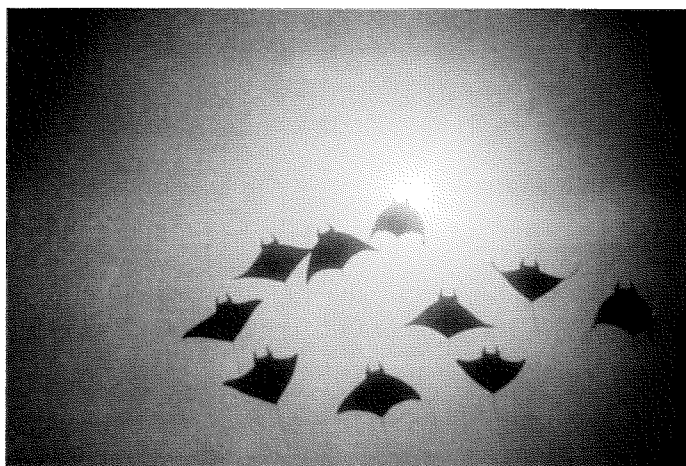
1999年1月23日(日)～3月31日(日)



ボクシングをするノウサギ / Manfred Danegger(Germany)

ここ郷土の森に梅の花がほころび始める頃、今年もまた、ワイルドライフ写真大賞展が開催されます。イギリスのBBCと英国自然史博物館が運営するこの写真コンテストは、世界でも権威あるもののひとつとして知られています。当博物館では、その最新の受賞作を一堂に紹介する展示会を、毎年、日本で最初の会場として行ないます。

世界各国から寄せられた数々の優れた自然写真は、動物・植物・水中の世界・自然景観・人間と自然などのテーマからなり、あらゆる自然の営みを捕らえ、圧倒的な感動を与えてくれます。これらは、いま地球規模で進めなければならない環境保全・自然保護・人間と自然との共存などの課題に対する、熱いメッセージとも受け取られるでしょう。



イトマキエイの群れ / Michael Cufer(Australia)

**ミニ展** 2 / 27(日)～3 / 31(日) 常設展示室にて  
**府中の高札と高札場**



府中市郷土の森にて

## みて よんで あるいて ③

—「街道模型」の旅人—

小野 一之

まずは気軽に郷土の森見物。本を読んで考えるのもいい。他の博物館にも行こう。

### 1

草薙の農家で2日過ごしてしまったので、ちょっと街へ出よう。ということで、師走で賑わう甲州街道の府中宿へ。府中市郷土の森の正門から続くメインロードは大きなケヤキの並木道。府中の街のシンボル、大国魂神社の参道を思わせます。とすると、これと交わるあの道は甲州街道だ。どっしりとした蔵造りの建物、大きな門構えと土蔵群を従えたお店などが移築復原され、かつての宿場町の風格を伝えています。

### 2

こうした府中宿の近世の全体像を関係資料とともに体感できるのが、博物館本館の常設展示室の府中宿町並模型です。縮尺 1/200、長さ9メートルの大きなジオラマを覗き込めば、東西を貫く甲州街道に沿って短冊状の屋敷地がぎっしり並び、景観が実に圧巻です。中心の大きな社が六所宮(大国魂神社)。ケヤキ並木の長い参道。今の府中駅はこのあたりかな。お寺の屋根が見える。墓地もある。川越街道との交差点。高札場とお旅所。街道を行く人々…。

あっ、何とその人たちの中に江戸時代にタイムスリップした自分の姿を見つけてしまったのだ。今日はそのまま、模型の中の旅人になって、いろいろな街道の「模型」を歩くことにしよう！

### 3

出発前に、片手には文庫本を、ということですが、東海道なら、東海道ネットワークの会編『完全東海道五十三次ガイド』(講談社+α文庫)が現代の

道筋や土産も紹介して便利だし、中山道なら、児玉幸多『中山道を歩く』(公文庫)が味のある解説をしています。甲州街道には司馬遼太郎『街道をゆく1』(朝日文芸文庫)がありますが、「武蔵国で最大の都会というのは八王子だった」などと書かれてしまって、府中のフの字も出てこないで、いっそのこと当時の旅のガイドブック『江戸名所図会』3(ちくま学芸文庫)を。宿場町の賑わいを活写した挿し絵も多く、たいへん楽しめます。

### 4

さて、旅の最初は、西隣のくにたち郷土文化館の街道模型。農家ばかりの町並で、母屋は道に向いていません。有名な茶屋が、谷保天神に近い急坂のところがありました。

甲州街道を西に向かうのはここまでにして、折り返して江戸をめざすことにします。調布の布田五宿の次は、杉並区立郷土博物館の高井戸宿の模型。ここも農家が多いのですが、見物は道沿いに連なる外便所。旅人の下肥が田畑に活用されると言うので、いっぱい用を足そう。

新宿歴史博物館に模型がある甲州街道最後の宿場の内藤新宿は、さすがに賑やかですね。軒を連ねる旅籠もでかい。青梅街道との追分もある。街道の裏手を流れる玉川上水の桜は今が見頃。ひと足早い花見が楽しめました。江戸東京博物館の実物大に復元された日本橋を渡れば、甲州街道の旅もおしまいです。

### 5

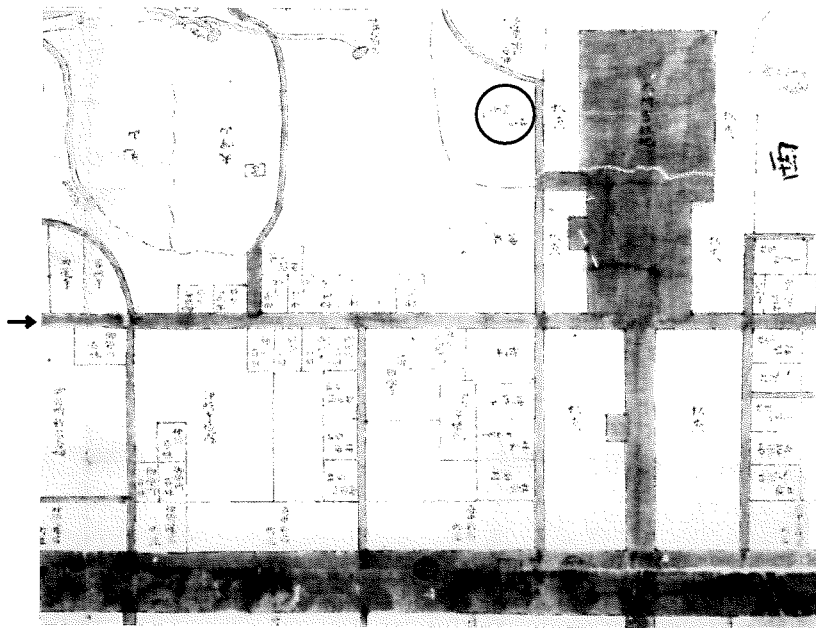
元気が残っている人は、中山道を北へ行ってみませんか。日光御成街道との追分をちょっと入って、景気のいい青物市を覗くのもいい。その模型は文京ふるさと歴史館で。一つめの宿場、板橋宿については、板橋区立郷土資料館がありますが、復元模型は計画の中の新設博物館に期待。

やがて出くわす荒川を、戸田市立郷土博物館の戸田渡船場の模型で渡りましょう。河岸場には高瀬舟も泊まっています。次は蕨市歴史民俗資料館の蕨宿模型。四方を用水堀と並木で囲まれた街は、まるで浮き島のように、絶景だ。大宮市立博物館には大宮宿の模型。由緒正しき氷川神社の長い長い参道が見事です。二つ先の桶川宿の模型は桶川市歴史民俗資料館にあり。見物は、本陣以下、道に対して斜めに構えた建物群。確かに見通しはよさそうですが。

### 6

模型目白押しの中山道も、これより先はないようなので、日本橋に引き返し、今度は東海道を。品川歴史館の品川宿の模型を通して、横浜市歴史博物館の洒落た茶屋で一服して、平塚市博物館の平塚宿の模型までがんばろう。空も大きく富士山もよく見えるし、相模川を越れば、まっすぐ府中に帰れるというわけです。

さてさて、今まで模型の中の旅人になって歩いたはずですが、疲れていません。鳥になって、街道を空から眺めてきたような感じもします。



神領古地図（部分）

大国魂神社が所蔵する元文3年(1738)の古地図。上が南。下方を東西に横切るのは近世の甲州街道。「京所通り」(→←)の南と北が「京所」と呼ばれた。六所宮の境内を社僧や社家の屋敷が取り巻いている。明王院は、境内東の神主屋敷の南隣(○)。

B: また、「あるむぜお」の原稿だってね。今度の話題は何かな？

A: いつものことながら、悩んでいてね。前回は、高安寺を中心に中世府中の軍事的性格を話題にしたから(42号、「鎌倉公方と武城」、今回は近世の六所宮(現大国魂神社)を素材に別な側面を考えてみようと思うんだ。

### ▼ 六十六部回国巡礼と武蔵国の霊場

A: 六十六部回国巡礼ってあるだろ。

B: 全国六十六か国を遍歴して、書写した六十六部の法華経をそれぞれの霊場に納めて行くことだね。たしか中世に起源があって、近世にも継続するんだよね。

A: その通り。ただ、中世の霊場については、ほとんど判っていないのが現状なんだ。ところが、近世になると、一般庶民にも回国巡礼が広まって、各国で数か所の霊場が納経所となっていて、しかもそれが一定しないんだ。

B: それで、武蔵の霊場は？

A: 中世の霊場については全く史料がなくて、判っていないんだ。

近世になると、いくつかの回国巡礼の手引き書が出版されていて、国分寺や大宮の氷川神社などが揚げられる場合もあるけれど、六所宮が一般的だったようなんだ(「六十六部聖巡拝路」「日本回国六十六部縁起」など)。

B: 遅くとも、近世には六所宮が回国巡礼の霊場として位置付けられていたということだね。

でも、六所宮がそういった霊場だったとは、余り知られていないんじゃないのかな。六所宮には、関係する史料はないのかい？

A: ないみたいだね。それは、明治の神仏分離の影響かも知れないな。そもそも、神仏分離以前の六所宮には、社僧という僧侶がいたから、納経に関わることがらは、専ら彼らの職掌だったと思うんだ。

### ▼ 京所

A: ところで、六所宮の東側をかつて「京所(きょうず)」といっただろ。

B: 宮町2・3丁目の大部分の字名だね。「京所通り」という道の名前に名残があるよ。

A: 古代国府の研究者には、これを「国府津(こうず)」の転訛という人がいるのだけれど。

それはともかく、「京所」の字は、すでに延宝6年(1678)の検地帳で使われているけれど、そこでは「きょう女」と書いている場合もあってね。本町1丁目にある安養寺の過去帳でも、江戸時代には「京所」と「経所」の両方が使われているし、『武蔵府中物語』の上巻(猿渡盛厚著1963年)によると、安養寺の隣にある妙光院の過去帳では、すでに永禄(1558~70)頃

に「経所」が使われているというんだ。

今は、「キョウズ」といっているけれど、「きょう女」も「経所」も音は「キョウジョ」だろ。本来は「経所(キョウジョ)」だったと考えていいんじゃないかな。

B:なるほど。「京所」の「京」は経典の「経」で、納経所のあった場所と考えるわけだな。

A:うん。最近それを裏付ける興味深い史料にも気がついてね。

小野宮(現 市内住吉町)の内藤重鎮<sup>しげつね</sup>という人が、祖父である重喬<sup>しげたか</sup>から聞いた昔話を書きとめた『往昔夜話』というのがあるね。天保14年(1843)にできたものなのだけれど、そこに「京所といふ地名ハむかしハ経所と書候。六十六部回国順礼之者六所明神へ納経する輩の納経所有之候所故=経所と申候なり。」と書いてあるんだ(府中市教育委員会編『府中市教育史資料編1』1998年)。

B:六所宮の納経所が、京所にあったということだね。

でも、江戸時代後期の史料とはいえ、「むかし」がいつなのか特定できない点では、伝承の域をでないんじゃないのかな。

A:厳しいね。でも実はほかにも、この京所に納経所があったことを示す史料があるんだ。

回国巡礼の各地の霊場を示した史料は、さっき話をした手引き書ばかりでなくて、回国した巡礼者たちが残した史料もあるんだ。巡礼者が納経先で発行してもらった証明書の類を綴ったもので、納経請取帳と呼ばれることが多いんだ。今まで注目されることの少なかつた史料だけれど、近年、それが徐々に公にされているんだよ。

### ▼ 六所宮の納経所

A:こうした納経請取帳のなかに、六所宮のどこに納経したのか、あるいは誰が請け取ったのかを書き留めたものがあるね。それによると、六所宮の社僧である明王院や護摩堂が経典を請け取っているんだ(藤田定興「六部行者の納経所について」『福島県歴史資料館研究紀要』13 1991年)。

B:六所宮では、社僧や社家の屋敷が境内を取り囲むように配置されていたんだよね。

A:そうだね。神仏分離まで、明王院は境内の東隣、神主の屋敷の南にあったんだ。

B:まさに、京所じゃないか。

それで、護摩堂は?

A:江戸時代の境内図がいくつか残されているんだけどね。そのうち、江戸中期と推定される境内図(『御社頭古絵図』大国魂神社蔵)を見ると、境内に護摩堂があるんだ。

ところが、寛政12年(1800)に猿渡盛章<sup>もりあきら</sup>が著した『新撰総社伝記』には、境内の護摩堂は享保年間(1716～

36)に移したもので、もともとは明王院の敷地内にあって、護摩堂は明王院のことを指していたと書いてあるんだ(大国魂神社『武蔵総社 大国魂神社史料 第一輯』1944年)。

B:ということは、六所宮における回国巡礼の納経は、明王院が管轄し、享保までは境内の外で行っていた。そしてその明王院は京所にあったということだね。

A:そう。『往昔夜話』の記述にピッタリ一致するだろう。もともと明王院という納経所があったから「経所」と呼ばれていたのが、いつの頃からか「京所」に変わってしまったんだよ。

ついでにいうとね、近世には、巡礼者たちによって、各地に石製の供養塔が造立されているんだ。その多くは、回国成就に際して造立されたものだから、その趨勢は回国巡礼の流行りすたりを大まかに示しているんだ。以前、府中を中心とした南武蔵で、それを集めたことがあるのだけれど、この地域では1710～20年代の造立が最も活発で、19世紀にはすたれて行くことが判ったんだよ(「府中市西蔵院出土 近世埋経資料をめぐって」『府中市郷土の森紀要』10 1997年)。護摩堂が六所宮の境内に移されたのは、まさに巡礼が活発だった時期に当たるだろ。だから、護摩堂の移転は、そうした影響と考えることもできると思うんだ。

### ▼ 納経所の成立をめぐって

B:なるほどね。でもちょっと待てよ。「京所」にある明王院が納経所であったことはよく判ったけれど、「京所」の用字は延宝6年までさかのぼるんだろ。それなら、巡礼が盛んになる前から「京所」といっていたことになって、辻褄が合わないんじゃないか?

A:なかなか、鋭いね。でも、「経所」が中世末期の永禄頃までさかのぼることも事実だよ。それに、近世の主要な霊場は中世にさかのぼることも指摘されているからね(関秀夫『経塚の諸相とその展開』1990年)。

中世の史料がないから想像の域を出る訳じゃないけれど、納経所の成立は中世にさかのぼらせていいんじゃないのかな。

B:「京所」は六所宮の納経所で、それは中世にすでに存在したということだね。たしかに話を聞いていたら、その可能性が高いように思えてきたよ。

それにしても、神仏分離以前にはまさしく神仏が一体となっていたことは判っていたつもりだけど、どうも、六所宮というと、当たり前のように国内神祇の中核として強調されてきたから、意外な側面だったよ。

六所宮の持つ様々な機能が決して境内のみで完結する訳ではないことにも、注意したいね。



# がめらと〜きんで

たび重なる台風の来襲の後、ようやく秋晴れの日がやってきました。

「郷土芸能と縁日の森」。



年に一度の「郷土の森」の盛大な秋祭りです。ドーン、ドーン、ドーン...と大太鼓の響きが園内の樹々や建物にこだまします。博物館前で、並木道で、古民家の前で、お雛子や、さまざまな大道芸も始まりました。昔なつかしい屋台が並び、それぞれの古い建物内や「ふるさと体験館」では、貴重な伝統的な職人さんたちの技も間近にみることもできました。

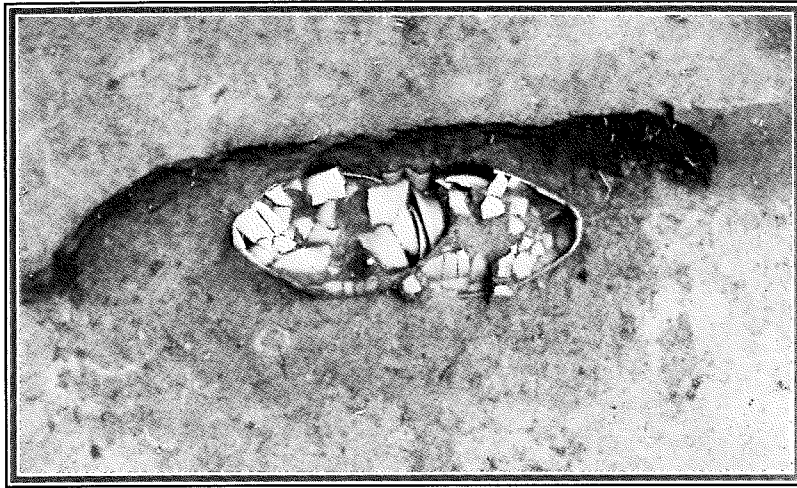
10月10日と11日の二日間。  
お祭りの参加者は合わせて、12,670人。



# 国府住人の墓か？

緑町ヤナセ東京支店東府中営業所地区から

府中市遺跡調査会 野田憲一郎

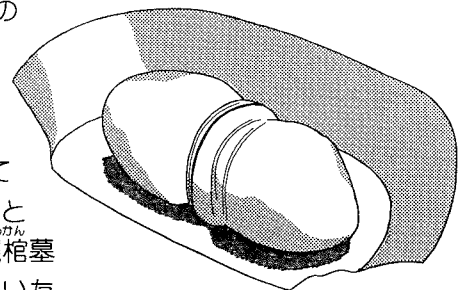


市域の発掘調査では、奈良・平安時代の、たくさんの土器が出土します。これらの土器は、食物を盛るための「坏」や煮炊き用の「甕」、貯蔵用の「壺」など種類によって用途が決まっていたが、形を変えて碗に転用したり、竈の補強材にしたりと、全く別な目的で使われることもあります。今回は、土師器の甕が2個、口の部分を合わせて埋められていた珍しい事例を紹介しましょう。

この甕が見つかった場所は、京王線東府中駅の北西で、国道20号線沿いの発掘現場です。この遺構は、調査区の西際から甕が頭を少しだけ出していたため運良く見つけることができました。土師器甕は、現在の地表面から約50センチ下で、長さ約1メートル、幅約55センチ、深さ約20センチ以上の長楕円形をした穴の中に2個埋められていました。残念なことに、後世に堆積した土の圧力によって、2個の甕は、上から押し潰されている状態でした。が、右の図に示したように、甕の口の部分を合わせ、横に寝かせた状態に復元できます。この土師器甕は、平安時代に武蔵国で広く流通した「武蔵型甕」と呼ばれるもので、その出土した武蔵型甕の年代観から判断すると、2個の甕が埋められたのは、9世紀代（平安時代前期）と考えられます。

それでは、この甕はどういう目的で埋められたのでしょうか。市内では、このほかに同様な事例が3例見つかっています。そのうちの2例は、今回のものと同様に、横に寝かせて置かれていて、甕の中には土以外何も入っていませんでした。しかし、残る1例は、合せ口の甕が直立していて、中には成人の火葬骨が入っていました。9世紀～10世紀前半にかけて、この武蔵型甕を骨蔵器とする火葬墓が普及しますが、合せ口にした火葬墓は少数派で、武蔵型甕と坏や碗、または須恵器の蓋という組み合わせが多数を占めています。横向きになった合せ口の甕からは、比較的残りやすいとされている歯の骨さえ確認されなかったことを踏まえると、火葬墓と断定することはできません。合わせた甕のサイズからすると、小児を埋葬するための甕棺墓かも知れませんが、胎衣容器の可能性もあります。今後、甕の中に入っていた土を科学的に分析することで、明らかになることを期待したいと思います。

ところで、これら合せ口甕は、武蔵国庁推定地（大国魂神社東側一帯）を中心に広がる集落の外縁部から出土しています。これは何を意味するのでしょうか。甕の中の内容物が不明な現段階では、はっきりとは言えませんが、死者を埋葬したものであれば、集落内に埋葬することを忌み嫌う習俗があったと考えられます。埋葬遺構は、群集して見つかることが多く、今回のように単独で見つかった場合でも、隣接する地区に存在する可能性があります。今後同じような例が多く見つければ、当時の生活や習俗を知る大きな手がかりとなるでしょう。



発掘の状況からすると上の図のように復元できる。火葬骨を入れて横向きに置くのだろうか。甕の大きさは30センチ弱だから、二つ合わせて60センチに満たない。子供ならば甕棺として使うことも可能な大きさだ。しかし、子供の骨だから融けてしまったのだろうか。いったい何のために埋めたのか。

郷土の森の広い園内にある“ふるさと体験館”。その中には、今はもう、ほとんど見ることのできない鍛冶屋の作業場が再現されています。

相原さんは、市内にただ一人残る鍛冶屋さん。月に1・2回、ここで実際に包丁や鉈やナイフなどの刃物を作ってもらっています。

インタビューアー Fukasawa

ふるさと体験館ができたのが1994年2月でしたから、早いもので、もう、4年半もお付き合いいただいていますね。今時は、めったに目にする事のない野鍛冶の作業を、多くの人たちに見ていただきたくて、お願いをしたわけですが、当時は振返ると…。

相原(以下I) そうさなあ～。初めのうちは、見世物じゃねえっていう気持ちと、仕事を見られる小っ恥ずかしさが入り混じって、変な感じがしたもんだけど、いいかげん慣れたな。

鍛冶屋なんか、むかしは沢山いたもんだけども…、珍しがられる仕事になったってこった。これも時代だからしょうがねえか。

確かに、誰だって日々の仕事を見られるのは、抵抗がありますよね。だからこそ、相原さんの側にも、少しでも何かプラスになることがあればと思っているのですが、なかなか…。

I そんなことはないよ。ふだんと違う仕事場でやるのも新鮮だし、熱心に観てくれるお客さんがいると自然に力も入るしね。

それに、鍛冶屋も少ないけど、ぶかぶかフィゴを吹いて、炭を燃して、サキテが大槌を振るうなんて、それこそ今時どこもやっていないよ。電動風車でコースを燃して、ベルトハンマーで延ばすのが普通だからな。俺の方でも、今じゃあ、けっこう楽しんでるんだよ。

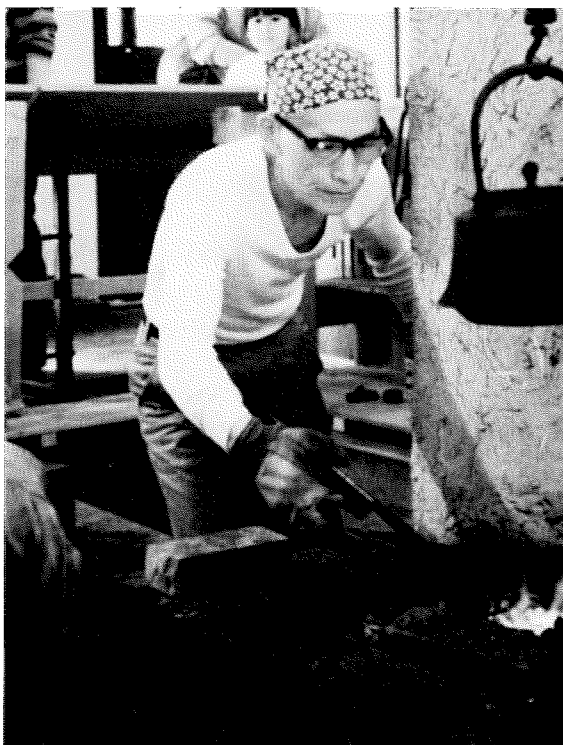
ただ、鍛冶屋の実演は、むかしを懐かしんだり、作り方を知らせてもらうためだけではなくて、少しでも本物の手作りの良さを知ってもらいたいという気持ちがあります。そういう意味では、包丁を打って欲しいなんていう注文があると嬉しいのですが。

I スーパーへいけば、1,000円やそこいらで買えるんだ、そんなに注文があるもんじゃないよ。それもしようがないだろ。

はじめて見る子供たちが好奇心を持ってくれれば、それで充分だよ。実際、子供が一番熱心なんじゃねえか。

そうですね。あの派手な音と炎が好奇心をくすぐってくれますし、何よりあの固い鉄が、金槌一つで形を変えていく様子には、引付けられますよ。相原さん自身は親父さんの跡を継いだわけですけど、ご自身の子供の頃は…。

I どうだったかな…。親父が死んで後を継げたんだから、何とはなしにみていたんだろうな。



「門前の小僧…」ってやつですね。

I たまに、えらく詳しくて、子供に解説している親や爺さんもいるよな。いつもあんな人がいてくれると、初めて見た子供でも、何をやっているのか良く判るんじゃないかねえかな。

ええ。まわりにいる見学者にも聞こえるから、僕たちが説明する手間も省けますしね。あと、僕らの話(解説)が難しかった時に、子供に優しい言葉で言い直してくれたりする親がいると、ありがたいですね。

そうした作り方だけでなく、相原さんの仕事振りそのものが、親の仕事を見る機会の少ない子供たちには新鮮かも知れません。仕事振りをみて子供たちに何かが残ってくればいいのですが…。

I そんな大それたもんじゃねえだろう。

そんなことないと思いますよ。当たり前だけど、仕事中は真剣そのものじゃないですか。それだけでも、貴重な体験ですよ。

I そりゃあ、やっぱり、気に入ったものを作りたいからな。自分で満足できないものを、お客さんには売れないよ。

そういやあ、そもそも、深澤さんこそ、鍛冶屋の手伝いをするとは思ってもなかったろ。

ほんと。僕自身、鍛冶屋の仕事を見たことはなかったですからね。大槌を振るなんて夢にも。一番貴重な体験をしているのは、相原さんでも見学者でもなくて、僕かも知れませんね。これからも、貴重な体験を続けさせて下さい。